

【全訳】

ユイ、リン、タロウは中学生です。彼らは教室で話しています。今、彼らの英語の先生のティム・ブラウンが彼らのところにやって来ます。

ブラウン先生：こんにちは、みんな。何について話しているのかな？

ユイ：こんにちは、ブラウン先生。よいタイミング！ 私たちは来月の学園祭について話しているんです。私たちのクラスは学園祭で出し物をするつもりなんです。

ブラウン先生：へえ、でもなぜよいタイミングなんだい？

リン：私たちは英語で芝居をするつもりなんです。英語で台本を書くのは私たちにはとても難しいんです。できたら、先生に…。

ブラウン先生：なるほど。きみたちは私の助けが必要だということだね？

リン：そうなんです！ タロウと私が今台本を書いているんです。難しい箇所になったら先生に助けを求めたいんです。

ブラウン先生：わかった。喜んできみたちを助けるよ。それで、どんな種類の芝居をするつもりなんだい？

タロウ：『桃太郎』の劇をやるつもりなんです。先生はそのお話を知っていますか？

ブラウン先生：もちろん。そのお話では、強い男の子の桃太郎が3匹の動物の仲間たちと一緒に悪い鬼を倒すんだ。私は日本語でそのお話を読んだことがあるよ。

リン：私たちはもう大部分の役を決めました。この紙を見てください。配役が書いてあります。

リンはブラウン先生に1枚の紙を手渡します。

ブラウン先生：ケンジが主人公を演じるの？ 彼は上手な英語を話すね。

タロウ：ええ、それに彼は演技も得意なんです。ア はくらはみな彼の役について意見が一致しています。 ユイとコウタとマナは3匹の動物を演じます。彼らは活動的でスポーツが得意なので、彼らにとってそれらの役は申し分ありません。

ユイ：私は犬を演じます。私は犬が大好きなのでうれしいです。

コウタはサルで、マナはキジです。私たちは自分たちの衣装を作るので、図書館やインターネットでこの動物たちについて調べるつもりです。

ブラウン先生：きみたちがうまくできるといいね。ところで、鬼の親分はだれが演じるんだい？

リン：ええと、それが問題なんです。その役は悪役なのでだれも演じたがらないんです。

ブラウン先生：悪役だけど重要な役だよ。その鬼なしでは『桃太郎』の芝居はできないよ。

タロウ：はくもそう思います。実は、はくはその役を演じたかったのですが、はくはあまり背が高くなく体も大きくありません。鬼の親分のように見えないと思うんです。

ブラウン先生：うーん、それなら、私がその役をやろう。

ユイ：先生がですか？ そんなことはまったく考えませんでした。そんなことできるんですか？

ブラウン先生：たぶね。私たち教師は学園祭で生徒の出し物に参加することができるよ。私は体が大きく背も高いし、柔道の練習をしているから強い鬼を演じることができると思うんだ。

リン：先生の言う通りかもしれませんが、先生はかまわないんですか？ その役はあまりかっこよくありません。

ブラウン先生：きみはどうしてそう思うんだい？ 私は日本のものもアメリカのものも映画をよく見るんだ。いくつかの映画では、とてもかっこいい悪者を日にすることができるよ。私はきみたちの芝居で最高にかっこいい鬼を演じたいな。

ユイ：すてきです。私たちのお芝居で先生を見たいです。

タロウ：はい、かっこいいです！ はくは鬼の軍団のメンバーを演じたいな。他のクラスメートの中にも参加する人がいるかもしれません。

リン：みんな私たちの芝居を楽しむと思うわ。

ブラウン先生：よし。決まりだね。

ブラウン先生は紙に何かを書いてその紙を生徒たちに見せま

す。